

シラ書 15 章 11-20 節

コリントの信徒への手紙一 3 章 1-9 節

マタイによる福音書 5 章 21-24、27-30、33-37 節

昨日は、「北関東教区との宣教協働・教区新設に関する説明懇談会」の二回目がありました。主教のお話と財政的な事柄の説明の後、教会グループに分かれて、「もし合同することになったら」という仮定の下、どのような新しい歩みができるかについて話し合いがもたれました。最後はリモートを通して北関東教区の皆さまと一緒に夕の礼拝を捧げて終わりとなりました。日本聖公会全体につながるこの新しい試みに、これからも祈り続けたいと思います。

本日は、わたしたちの教会も礼拝後に堅信受領者総会が開かれます。議案のほかに、聖堂の整備について事柄を中心に、この地での宣教について、そして、教会委員会のあり方について、皆さまからご意見をいただきたいと思います。

さて、『聖書』は、引き続き福音書の山上の説教から学びます。今日の箇所では、それぞれが一部省略されていますが、「殺人、姦淫、誓い」が主題となっています。それらを通してイエス様が何を教えようとしているのか、結論を先に言えば、『聖書（旧約）』の律法部分とその解釈、言い伝えの部分、それらを超えて、主なる神様の法と戒めを徹底して実行しなさいということです。ただし、その徹底ぶりは、他の山上の説教の箇所とともに、実行不可能と思われるところもあります。またイエス様が実際に語られた時の状況と、「マタイによる福音書」がその教えを福音書の物語の中に位置づけた時の状況は異なっています。また、それらの状況がはっきりとわかっているわけではなりません。それゆえに、ある程度想像を含めて解釈する必要があります。

イエス様が語った時の状況において、教えの聞き手が誰であったかと考えますと、それは福音書が示す通り（マタイ 5:1）、群衆であったとするのが一番蓋然性の高い推測であると思います。ただし、時と場所は不明といえるでしょう。また、群衆という言葉は、特徴を定めることはできません。それゆえ、弟子たちのようなイエス様に意図的に従う人々のほか、律法を学び実行することに熱心な人々、ある程度あるいは適度に律法を守って生活している人々、そしてそれらの人々から律法によって区別された人々もいたと思います。律法によって区別されていた人々とは、生活のために律法を守ることができない人々、あるいは生まれつきの病気や体の不自由さのゆえに人生の最初から律法によって差別されている人々です。そのようないろいろな人がいたこと、つまりまさに特定の集団に限らない人々、それがイエス様の周りにいた群衆であったといえます。そのような人々に対して、イエス様は更なる律法の徹底を語ったのです。

さて、律法を守ることに熱心な人、またはある程度守る人はよいと思うのですが、律法によって差別されている人に対して、その廃止ではなく徹底を語ってどうするのかと勝手に思ってしまう。しかし、それは逆説的な教えをしていると考えられます。つまり、律法を守るとは、実践不可能と思えるような律法の徹底が必要である、しかし、今、律法によって人を分け隔てし、区別し、そして自らを善として差別している人々もいる。それゆえもしそうするのであるならば、そこまで徹底しなければならないという批判です。言い換えれば、もし守るか守れない

かということをお大切な尺度として律法をとらえ、その尺度に従って人を分け隔てるのであれば、ここまで徹底してなさいということです。イエス様はそのような警告をすべての人に与えたといえます。

この徹底を求めるイエス様の教えは、多くの人に驚きを与えたものと思います。しかし、徹底すれば理想の世界が始まるかもしれない、そのような希望も与えたと思います。つまり、イエス様が律法の徹底を語った目的とは、律法を超えて示される主なる神様の意図を示すことであつたのです。つまり、主なる神様は、今苦しんでいる人々を愛されている、そのことを律法の徹底を通して示そうとされたということです。悲しむ人々がどこかにいるにもかかわらず、自分たちは律法を守っているとは言えない、悲しむ人がいなくなる限り、誰も律法を全うしたとは言えないということです。逆に、そのような悲しむ人々から律法について考えるとき、何をどのように実行すべきかがわかるということも教えていると思います。そして、イエス様のご生涯とは、そのような形での律法の実践の歩みであつたのです。しかし同時に、イエス様のご生涯と時をともした人たちであっても、十字架と復活を知るまでは、イエス様の教え通りに律法を実践することはなかつたとも言えます。

さて、「マタイによる福音書」が書かれた時代は、このイエス様の状況とは異なっています。「マタイによる福音書」の状況は、これらのイエスの教えを、実際に実行しようと考えていたからです。しかし、その実行の仕方は、他の山上の説教の箇所とも同じく、「教会」という枠組みの中でした。つまり、一般社会ではなく兄弟姉妹という関係のある教会の中で、実行しそれを完成することを目指し、そのようにイエス様の教えを受け止めているのです。「マタイによる福音書」をお大切にしていた人々、すなわちその教会が、どれほどイエス様の教え通りに実践できたのかはわかりません。また、何かを完成したこともなかつたと思います。しかし、その自分たちの教会において、人と人とのつながりを大切にしようとしていたことは確かです。そしてそのような歩みが、ローマ帝国内で人々の注目を集め、希望や生き方の道しるべとなつたことも確かであると思います。

それでは結局、教会も徹底できなかつたのであれば、イスラエルと同じではないか、そのような疑問も起こります。確かに完成しなかつたという意味ではそうかもしれませんが、「マタイによる福音書」は、その完成という事柄を終末の時に置いています。そして、それがいつどのような形で起こるのかはわかりません。しかし、イエス様の教えから考えれば、この世界に悲しみ一つもなくなる時であると思います。教会は、たとえそれぞれの信仰者が、自分の生きている間に、律法の完成を達成できなかつたとしても、教会を通してそれを試み続けることが大切なのです。

律法の完成に向けた、各個人の歩みも教会の歩みも、人間の思考と努力では生み出されません。しかし、十字架と復活の出来事において、もっとも大切な主なる神様の愛が示されている、そこから、歩みは示されます。わたしたちは、イエス様の教えを聞いた群衆とも、「マタイによる福音書」をお大切にしたい教会とも異なります。しかし、イエス様の十字架と復活をいつも見つめ、わたしたちの歩みを考えるとき、わたしたちにこの地に託された宣教が示されます。その歩みをご一緒に見出しつつ、一つ一つ実行していきたいと思ひます。